

カリフォルニア州ロサンゼルス統一学区における英語教育の試みと日本における小学校英語教育への示唆

田中真紀子

Abstract

A great many immigrants are flooding into the US each year and an increasing number of children are having problems with understanding and responding in English. Those children are labeled as English Language Learners (ELLs), and California has one third of such children. This paper discusses California's language policy, and focuses on the English language education policy of the Los Angeles Unified School District (LAUSD), which is the nation's second biggest school district with a large number of ELLs. The paper attempts to derive implications for Japanese English language teaching from the LAUSD's English language teaching methods based on the author's observations of elementary schools in Los Angeles.

はじめに

現在アメリカでは、本土全域に渡って、いわゆる英語ができない子どもたちが急増している。彼らは English Language Learner (ELL) あるいは English Learner (EL)、Limited English Proficient (LEP: 英語力に制限のある学習者) などと呼ばれ(以下 ELL 学習者)、英語を母語とせず、一般の科目を英語を母語とする者と一緒に受けて、授業についていけるだけの十分な英語力がないと判断された、幼稚園から高校(以下、K-12)までの生徒たちである (“An EL is a K-12 student who, based on an objective assessment, has not developed

listening, speaking, reading, and writing proficiencies in English sufficient for participation in the regular school program.” California Department of Education, 2006, p.1)。カリフォルニア州やテキサス州などはすでに以前から多くの ELL 学習者を抱えていることは知られているが、近年は他の州でも ELL 学習者が急増する現象が見られるようになった。例えば、インディアナ州、ケンタッキー州では 1994-1995 年度から 2004-2005 年度の間に 4 倍増、サウスカロライナ州に至っては 7 倍増という人口増加となっている (Payán & Nettles, 2008)。TOEFL や TOEIC などのテストの開発を行っている ETS の会長 (Kurt Landgraf) がこの現象を捉え、「アメリカはもはや、K-12 の少数人口 (“minority part of our population” [すなわち、英語を母語とする子どもたち]) ではなく、急激に K-12 の大半を占めつつある人口 (“the part of the population that is very quickly becoming the majority part of our K-12 student cohort” [すなわち英語を母語としない ELL 学習者]) の問題を真剣に考えなければならない」(ETS, 2008, p.2) と述べているように、アメリカでは現在、ELL 学習者への英語教育に関して、尚一層深刻な事態に直面しているのである。

本稿ではまず、ELL 学習者を多く抱えているカリフォルニア州の英語教育政策を概観し、州の英語教育事情を理解した上で、次に筆者が教員研修を受けたロサンゼルス統一学区の英語教育の試みを概説する。そこからロサンゼルスの小学校を何校か訪れた際、授業で何度も目にしたロサンゼルス市内小学校の特徴的な指導の方法を紹介し、日本における小学校英語教育への示唆を得ることにしたい。

カリフォルニアにおける英語教育政策

アメリカでは、2004-2005 年現在、「英語学習者」(English Language Learner : ELL 学習者) と称される子どもたちが、K-12 の全生徒数の 10.5% を占める 500 万人相当存在する。そしてそのうちの 79% がスペイン語を母語とする

カリフォルニア州ロサンゼルス統一学区における英語教育の
試みと日本における小学校英語教育への示唆

子どもたちである (ETS, 2008)。ELL 学習者は 1995-1996 年度から 2005-2006 年度の期間に、実に 57% も増加し、アメリカの政治・経済の動向に大きな影響を及ぼしている (Botalova, 2008 の調査によると、アメリカでは毎年 150 万人の移民が入ってくる)。

ELL 学習者は特にアリゾナ州、カリフォルニア州、テキサス州、ニューヨーク州に集中しており、これらの州で全体の 61% を占めている。カリフォルニア州は全 ELL 学習者人口の 1/3 (160 万人) を抱えており、そのうち 85% がスペイン語を話す子どもたちである。そこで、アメリカ連邦政府は、2001 年に制定した No Child Left Behind (NCLB : 「落ちこぼれゼロ運動」) の政策の一環として、アメリカ全土で急増しつつある ELL 学習者の特定、そして州が制定したテストに基づいて彼らの英語力を評価、習熟状況の報告を義務づけ、これまでよりも尚一層彼らの指導に責任を持つよう勧告している。それでは、カリフォルニア州の英語教育はどのようなになっているのだろうか。ここでは州の政策を簡単に見ておくことにする。

カリフォルニア州も連邦政府の規定に則った教育が施されている。カリフォルニアでは子どもを公立小学校に入学させる際、まず、保護者に Home Language Survey と呼ばれる調査表が配られる。この調査表の結果、子どもの母語 (家庭で使われている言語) が英語でない判断された場合、児童は、話す・聞く能力の測定を中心とした「カリフォルニア英語能力テスト」(California English Language Development Test: CELDT) を受験しなければならない。このテストで英語学習者 (EL: English Learners/ English Language Learners) と判断された児童は、ELL 学習者用にプログラムされたクラスに入る。ELL 学習者用のクラスには二つ種類がある。テスト結果が Beginner, Early Intermediate, Intermediate と最初の 3 つのレベルのいずれかに判断された児童は “less than ‘reasonable fluency’ ” とされ、Structured English Immersion (SEI: Sheltered English Immersion としても知られる) のクラスへ入

学させられる。もう一つは English Language Mainstream と呼ばれるクラスで “reasonable fluency”/“good working knowledge of English” があると判断された Early Advanced と Advanced のレベルの児童が受けるクラスである (ちなみにこのクラスは Home Language Survey で、子どもの母語が英語であると回答した保護者の子ども達が受けるクラスである)。ELL 学習者は十分な英語力を身につけたら (“when the pupil has acquired a reasonable level of English proficiency”) SEI のクラスから English Language Mainstream のクラスへ移される (California Department of Education 2006, p.1)。カリフォルニアで採用されている CELDT という英語能力判定テストは、入学時の英語のクラス分けに使われるだけでなく、ELL 学習者の年間の英語習熟度を評価したり、また ELL レベル分けの再編成 (Reclassification) にも使用されている (ELL 学習者の言語及び学習者要因が及ぼす CELDT への影響、またクラス分け再編成に関する詳しいデータは Jepsen & De Alth, 2005 参照)。

「二言語／バイリンガル教育」 (“Bilingual” education) と「英語オンリー教育」 (“English Only” education) の背景

カリフォルニア州では現在、ELL 学習者に対して、英語で英語を教える「英語オンリー」の言語政策を採っている。かつては「二言語教育／バイリンガル教育」(ELL 学習者に彼らの母語で英語を教え、英語を身につけさせようとする教育) が行われていたが、1998 年 6 月にプロポジション 227(Proposition 227) が賛成 61%、反対 39%という大差で採択されてから、二言語教育は事実上終焉している。ここでは、二言語教育から「英語オンリー」政策に移行することになった歴史的背景を概観する。

もともと、二言語教育政策は、1974 年のラウ対ニコルズ判決 (Lau vs. Nichols) の影響を大きく受けている。この訴訟は中国系移民が教育委員会は中国系アメリカ人の児童に対して、特別な言語指導を行っていない、従って

カリフォルニア州ロサンゼルス統一学区における英語教育の
試みと日本における小学校英語教育への示唆

教育を平等に受ける権利を保証する憲法修正第 14 条と公民法第 6 条に違反しているとして、サンフランシスコ教育委員会を相手取って起こしたものである。サンフランシスコ学区ではこの判決を受け、ELL 学習者に対して、二言語教育を提供する措置を取っている。その後、二言語教育は法的なバックアップを得て市民権を勝ち得ていったが、同時にその効果に疑問をもつ声も浮上するようになり、大掛かりな調査も行われるようになった。1981 年にはカスタニューダ対ピカード (Castañeda vs. Pickard) 判決により、教育が十分な人材及び資源のもと、研究に裏付けられた教育理論に基づいて効果的に行われているかどうか、加えて学習者の定期的評価を行うことなど、言語的少数民族への教育の向上が義務づけられた。

1980 年代になると、移民に英語言語文化への同化・融合を促す「英語オンリー」の動きが活発になってくる。これは非ヨーロッパ系の移民に、アメリカの文化・社会・言語が脅かされると懸念する人々の中から出て来た「英語の法的保護を説く動き」(バトラー 2003) で、「文化同化主義」に基づいている。そのような動きの中、カリフォルニア州では 1986 年にプロポジション 63 により、英語が州の公用語となった。そして 1998 年には ELL 学習者に対し、英語だけで教育することを規定したプロポジション 227 が 61% の賛成多数で、可決されるに至ったのである。

先にも述べたように、カリフォルニア州は英語を母語とせず、また英語能力が低いと判断される ELL 学習者を多数抱えている。プロポジション 227 は、このような ELL 学習者に対して行われている二言語教育は効果がない、場合によっては逆効果であるという主張と、英語に接する量が多ければ多いほど英語の習得は高まる、従って英語だけで行う方が教育は効果的である、という主張が根拠となっている。もともとロン・アンズ (Ron Unz: シリコンバレーの裕福なコンピュータソフトの起業家) の主導で「子どもたちに英語を」(English for Children) を旗印に始まったこの動きの賛成派は、プロポジショ

ン 227 採択以降、カリフォルニア州で採用されている統一テスト CELDT で ELL の成績が上がったとし、英語オンリーのプログラムの効果を主張している (しかし彼らの分析調査には多くの問題があり、事実を正確に伝えていないことが指摘されている。詳しくはバトラー 2003)。

プロポジション 227 をめぐっては、当初からアメリカ言語学会 (Linguistic Society of America, 1998) が学会の立場として反対決議を出しており、また S. Krashen, K. Hakuta, L. Filmore など多くの言語学者も反対の立場を取っている (西村 1999)。「二言語教育」にすべきか「英語オンリー教育」がいいかは、施行 (1998 年 8 月) されてから 9 年目を迎えた現在も尚一層言語教育理論とその評価をめぐって、深刻な方法上の対立を巻き起こしている (例えば、最近の例では、初等教育の専門家である Frede が、「子どもの母語の能力が高ければそれだけ英語をよりよく学べる」 (“The stronger their home language is, the better they’re able to do later, even in English.” ETS, 2008, p.7) と主張し、二言語教育賛成の立場を全面的に打ち出している: “All children should leave school bilingual” p.7)。

プロポジション 227 はカリフォルニアに激増する ELL 学習者に対する教育の在り方を根本的に見直そうとする姿勢が背景となり可決されるに至ったが、二言語教育を推奨する立場も、英語オンリー教育を主張する立場も、基本的に目指していることは「英語を母語としない子どもの英語力の向上」である。しかし、前者は英語とその母語の両方の会話力及び読み書きの能力を獲得することを目的とする「言語的文化的多元主義 / 文化複合主義」であるのに対し、後者は言語的少数派に属する生徒が、アメリカ社会 (アングロ・サクソンの文化及び言語) に同化できるようにすることを目的としており「言語的文化的一元主義 / 文化同化主義」の立場に基づいている。従って、プロポジション 227 本案の下では、まず、公立小学校では ELL に対して英語で授業を行うように義務づけ、さらに、ELL 学習者は通常 1 年以内で一

般のクラスに移されなければならない、としている。

ロサンゼルス市統一学区における英語教育の試み

それではここでロサンゼルス市統一学区では ELL 学習者に対してどのような英語教育が行われているか見てみることにする。「ロサンゼルス市統一学区」は一般的には「ロサンゼルス市教育委員会」とほぼ同義で使われており、全米で二番目に大きな教育委員会で、合計 11 学区を統括している。2007-2008 年現在、ロサンゼルス市統一学区に通っている小学校児童は 302,510 人 (小学校数 436 校)、中学生は 141,683 人 (中学校数 75 校)、そして高校生は 175,388 人 (高校数 64 校) である。その人種の内訳は、アメリカインディアン 0.3%、アジア系 3.7%、黒人 11.2%、フィリピン人 2.2%、ヒスパニック 72.8%、白人 8.9% となっている (Fingertip Facts 2007-2008, LAUSD)。

ロサンゼルス市では、2001 年、ブッシュ政権下で発足した連邦政府の教育政策、NCLB (No Child Left Behind: 「落ちこぼれゼロ運動」) を受けて、前述の通り、州が規定したカリフォルニア英語能力テスト (California English Language Development Test: CELDT) を非母語話者全員に受験することを義務づけているが、ロサンゼルス・タイムズ紙はその試験で、移民の子どもたちの成績が上がっていることを報告している (Los Angeles Times, March, 21, 2006)。幼稚園生と 1 年生はリスニングとスピーキング力、2 年生から 12 年生 (高校 3 年生) は加えて、読みとライティングの技能が評価されるが、同紙によると、カリフォルニアでは 2005 年に CELDT を受けた 130 万の ELL 学習者のうち、47% が「上級初期: Early Advanced」及び「上級: Advanced」のレベルの成績を修めたということである。そしてロサンゼルス市統一学区に通う小学校児童に関しては、この両レベルにおいて、2006 年の 19% から 2007 年には 33% の伸びをみせ、他の学区をしのいだ上、カリフォルニア全体では 2006 年-2007 年に、9% が FEP (Fluent English Proficient: 流暢な英語

学習者)に再編成(reclassified)されたのに対し、ロサンゼルス市統一学区では13%ものELL学習者がFEPに再編成された、ということである(News Release, LAUSD, 2007)。それではロサンゼルス市統一学区のプログラムはどのようになっているのだろうか。ロサンゼルス市では、全生徒に以下3つのプログラムが用意されている。

1) Structured English Immersion Program

このプログラムでは授業は「ほとんど(“Nearly all”)英語」で行われ、ELL学習者は、日常的な英語と、一般のクラスで必要なアカデミックな英語を教わる。このプログラムの目的は英語をさまざまな社会的な場面、学問的な目的で理解し、使用できるようにすることである。

2) Alternative Programs

a) Basic Bilingual Program: 二言語の使用ができる教師が、生徒の母語を用いて普通の教科(grade-level academic subjects)を教える。と同時に、生徒は英語も学習する。

b) Dual Language Program:

普通の教科が二つの言語で教えられる。二言語使用者の育成を目的としている。

3) Mainstream English Program

このプログラムは普通の教科を英語で教える。これは英語が母語である学習者用のプログラムである。

ロサンゼルス市では、SEI(Structured English Immersion/Sheltered English Immersion)のクラスに編成された児童は、カリフォルニア州のELD(English Language Development: 英語を母語としない人に対する学習カリキュラムのスタンダード、以下ELD)に添った教育を受ける。また授業はほとんど英語

カリフォルニア州ロサンゼルス統一学区における英語教育の
試みと日本における小学校英語教育への示唆

(“nearly all”)で行われることになっている。カリフォルニア州教育局の資料によると、ELD スタンダードは以下の通りである。

The English-language Development Standards are designed to supplement the English-language arts content standards to ensure that LEP students (now called ELs in California) develop proficiency in both the English language and the concepts and skills contained in the English-language arts content standards. The standards are designed to assist teachers in moving ELs to fluency in English and proficiency in the English-language arts content standards (California Department of Education, 2006)

ELD スタンダードは ELL 学習者が一般の英語のクラス (English language arts) に入れるようにするための準備クラスのようなもので、英語の力同様、一般の英語のクラスで必要とされるスキルを身につけることを目的としている。ELD の授業は州に容認されたカリキュラムを使って 1 日 30 分から 45 分行われる。リスニングとリーディングのアクティビティに関しては「理解可能なインプット」(comprehensible input) を与え、またスピーキングとライティングの指導は生徒の英語レベルに応じて行うように指導している。ELD のレベルの概略は以下、表 1 に示すとおりである。

表 1 English Language Development Levels

<p>ELD1: Beginning: The student is required to respond in English using gestures, simple words and phrases to demonstrate understanding while working with familiar situations and text. (初級：日常的な場面で、ジェスチャーや簡単な語を用いて理解を示すことができる)</p>
<p>ELD2: Early Intermediate: The student is required to respond in English using acquired vocabulary in phrases and simple sentences to demonstrate understanding of story details and basic situations with increasing independence. (中級初期：物語の細部や基本的な場面に関して学習した語句や簡単な文を用いてできるだけ自力で応答できる)</p>
<p>ELD3: Intermediate: The student is required to respond in English using expanded vocabulary and descriptive words for social and academic purposes with increased complexity and independence but with some inconsistencies. (中級：社会的な目的また学問的な目的を果たすために、より豊かな語彙を用いてまだ間違いはあるものの自力で応答できる)</p>
<p>ELD4: Early Advanced: The student is required to respond in English using complex vocabulary with greater accuracy; demonstrate detailed understanding of social and academic language and concepts with increased independence. (上級初期：複雑な語彙を使ってより正確に応答できる。また社会的、学問的な言葉と概念を詳細に理解していることをより自信をもって示せる。)</p>
<p>ELD5: Advanced: The student is required to respond in English using extended vocabulary in social and academic discourse to negotiate meaning and apply knowledge across the content areas. (上級：社会的学問的な談話で他分野からの知識を導入し意味の交渉を行いながら、さらに広範な語彙を使って英語で応答することができる。)</p>

Instructional Programs for English Learners (Los Angeles Unified School District 2002 年発行) より抜粋

カリフォルニア州ロサンゼルス統一学区における英語教育の試みと日本における小学校英語教育への示唆

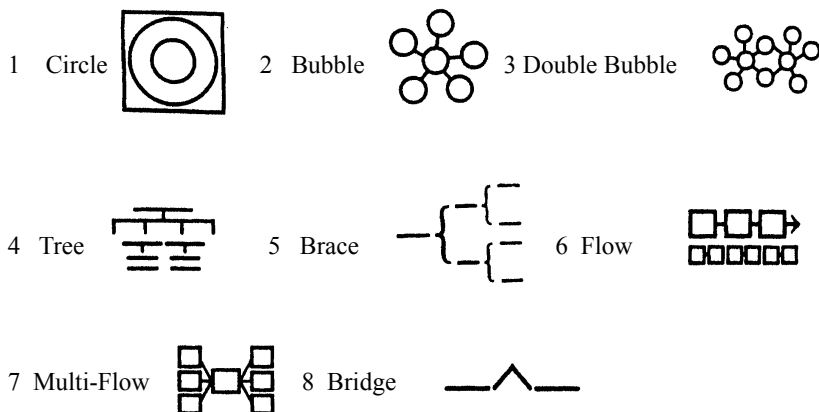
ELD は ELD1 初級から ELD5 上級まで、K-12 それぞれの学年を対象に、word analysis, vocabulary development, reading comprehension, literacy response and analysis, listening and speaking, writing strategies and applications, writing conventions に関して、それぞれのスタンダードが細かく規定されている。さらに教授用マニュアルが完備されていて、その中には ELL 学習者に合った指導方法(ストラテジーと方法論)、指導案、さまざまなアクティビティなどが豊富に用意されている。教師はそのスタンダードに添って授業プランを立て、また ELL 学習者の読み・書き・聞き・話すの習熟度の評価を行う。ELD の目的は、できるだけ ELL 学習者に早く英語を身につけさせ、英語を母語とする児童のクラスに編入させることである。そのため、ELL 学習者はその準備として、言語学的な知識だけでなく、アカデミック・スキルも ELD のクラスで勉強することになる。

日本の小学校英語教育への示唆

筆者は、ロサンゼルス市統一学区の、ESL (English as a Second Language) の教員研修を受け、市内の小学校を何校か訪れる機会を得たが、統一学区の指導はそのまま、市の小学校に受け継がれ、教員研修が行き届いていると同時に、各小学校が州や市の教育方針を忠実に遂行しているという印象を受けた。これは一つには市の指導主事の評価が厳しいことや、また小学校の校長も、州の教育スタンダードに添って作られた学問上及び指導上の細かいチェックリストに基づいて、厳しく教師を評価していることによるものと思われる。また、各小学校は 2001 年に規定された NCLB の規定に基づいて、州で採択されたテストを使って ELL 学習者の英語習得状況を報告しなければならないが、それでも ELL 学習者の英語の伸びが見られないとその学校は問題があるとされる。そのため各学校は真剣に英語教育に取り組む義務を負っているのだ。

さて、筆者が参加した教員研修の中でも度々取り上げられ、「訓練させられた」指導の方法に大変特徴的なストラテジーがあった。それは **thinking map** を使った指導の方法で、子どもたちに特に、語彙や概念を教える際に導入される方法である。 **thinking map** の種類は実に豊富で、具体的には以下のようなものがある。

表 2 Thinking map のいろいろ (LAUSD 教員研修用資料 2004 より)



これらは、語彙の学習では、語の定義をしたり、描写をしたり、比較対照したり、分類するために用いられる。しかし語彙は単独でなく、言語の形式 (language forms) と共に学習するようになっている。例えば、筆者が授業観察した教員は Circle map を使って、“swan” “wing” “white” などの語彙を教えていた。大きな模造紙の真ん中に円を描いて、そのなかに “swan” と綴る (図 1)。そして子どもたちに、“What does a swan have?” と問いかけ、児童から “wings” を引き出す。児童が知らない場合は、教師は羽の絵を描いてその横に wings と綴るのである。教師は次に、“What color is a swan?” と質問する。

そして児童から“white”という語を引き出す。と同時に羽の色を色鉛筆を用いて白く塗るのである。教師はこの時、他の色にも言及するので、児童は同時に他の色についても勉強する。具体的には、教師は“Is a swan purple? No? Is it pink?”などと進めていくのである。このように、語の導入に関して、「語」を学習するだけではなく、学習の対象となっているものの属性や特徴 (e.g., The _____ has _____. _____ are _____. It is _____.) なども同時に勉強する。

Double Bubble map は二つの異なるものを比較対照し、その共通性や異質性を整理するために使われるものであるが、ロサンゼルス市の教育委員会で配布された資料の一部で、実際に児童が描いた Double Bubble map の例には、リンゴとバナナの比較があり、一方のリンゴの方には色 (“red”) や歯触り (“crunchy”)、形 (“fat”) などが書き記され、もう一方のバナナの方は色 (“yellow”)、特性 (“will turn black”)、形状 (“skinny”) が書き記されている。そしてその共通項として、「柄がある」 (“stems”)、「種がある」 (“seeds”)、「フルーツである」 (“fruit”)、「中は色が白い」 (“white inside”)、「木に育つ」 (“grows on a tree”) と書き記されている (図2)。ちなみにこれを描いたのは7-8歳の児童である。これらの比較対照は、_____ have _____. _____ don't have _____. _____ can _____, but _____ cannot. _____ can _____, and _____ can _____, too. といった言語形式とともに勉強する。

Bridge map となるとかなりの認知能力が要求されるアクティビティとなる。これは The _____ (relating factor) _____ as _____ (relating factor) _____. という言語形式を使って、類推能力を養うものである。実際に子どもが描いた絵には、左半分には“rain”とその下に水の絵が描かれ“water”と綴られている。また右半分には“sun”とその下に電球の絵が描かれ、“light”と綴られている。「雨」と「太陽」の比較がされており、関連要因 (relating factor) として“gives”と描かれている。つまりこの絵は“The rain gives water as the sun

gives light.” (『雨』は水を与えてくれるように、『太陽』は光を与えてくれる』
という内容を表した絵である(図3)。

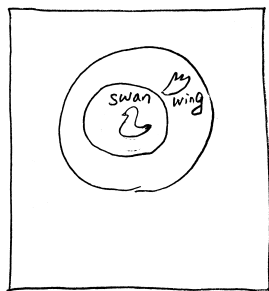


図 1

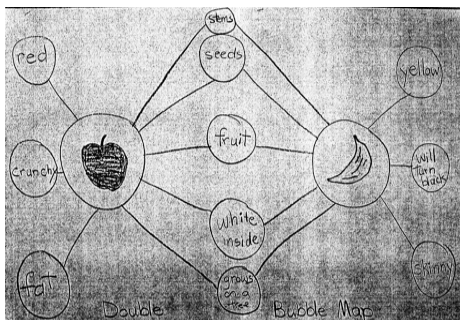


図 2

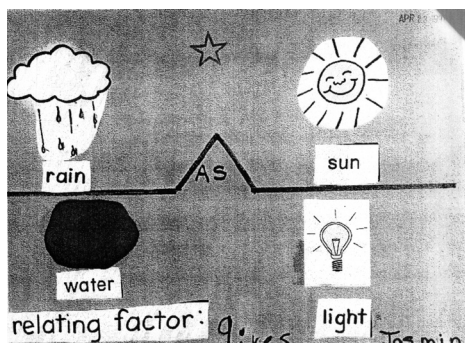


図 3

ロサンゼルス市の小学校で観た授業には、このように学習項目を定義する、
分類する、比較する、対照する、関連性を見いだす、共通項を書き出す、類
推するなど、分析能力や統合して考える力を養うことを基本にしたアクティ

ビティが非常に多く見られた。もちろん、これらは児童の認知発達段階を考慮して、それに見合った形で導入される。子どもたちはただ受け身的に語彙を教わるのではなく、関連性などを「考える」ことを要求されるのである。

今日本で行われている英語活動のアクティビティ内容を見ると、チャンツや歌、ゲームなどを利用したアクティビティが主流である。小学校によっては、自分の好きなものや行ってみたい場所を絵などを描いてクラスメートに発表したり、またアクティビティを通して、何かもの作りをしたりというようなプロジェクト型の英語活動を行っているところも見受けられるが、ロサンゼルス市の小学校で筆者が目にした思考力を身につけ、認知能力を高めるような要素を含んだ英語アクティビティをしているところは観たことがないし、また教材を分析していてもそのようなものは見当たらない。一件、ものの属性を捉えるというのは難しそうな印象を受けるが、絵を導入したり、グループで活動させると児童は大人が想像し得ない発想を持っていることを発見できたり、そのようなアクティビティを通して、子どもの興味を引き出すこともできる。また教師はこのようなアクティビティを導入することで、児童の認知発達をうながし、より多くのヒントを与える (“scaffolding”) ことで、語彙や文法の習得を助ける (“facilitate”) ことができる。もちろんこのような活動を導入するように急に言われても、簡単に始められるものではないであろう。ロサンゼルス市の小学校で広く導入されるにいたったのも、市の統一学区が、徹底して教員研修を行っているからであり、また教授用マニュアルにも細かく指導の方法が解説されているからである。しかし、2011年には「外国語活動」として英語が必修化されることになり、今後教科化される可能性が高まった今、また新たな視点で教材開発を考えることも必要ではないだろうか。児童の「考える力」を育成するような指導内容を豊富に含んだ教材の開発が待たれる。

参考文献

- Batalova, J. (2008). *Immigrant and ELL education: A demographic overview*. 2008 English-Language Learners Symposium (ETS-sponsored). Conference presentation PowerPoint slides. Retrieved September 15, 2008, from, http://www.ets.org/Media/Conferences_and_Events/pdf/ELLSymposium/Batallova.pdf
- California Department of Education website. <http://www.cde.ca.gov/>
- California Department of Education 2006. English language learners Frequently asked questions. Retrieved September 15, 2008, from <http://www.cde.ca.gov/sp/el/er>
- English language development standards for California Public Schools: Kindergarten through grade twelve. (2002). California Department of Education. Sacramento:CA.
- ETS Policy Information Center (2008). Coley, R.J. & Payan, R.M. (Eds.). ETS Policy notes--Addressing achievement gaps: The language acquisition and educational achievement of English-language learners. *ETS Policy notes*, Vol. 16, No. 2 Summer, 2008. Educational Testing Service. Princeton: NJ.
- Fingertip Facts 2007-2008. LAUSD. Retrieved September 15, 2008, from, http://notebook.lausd.net/pls/ptl/docs/PAGE/CA_LAUSD/LAUSDNET/OFFICES/COMMUNICATIONS/COMMUNICATIONS_FACTS/0708ENG_FINGERTIP_FACT_SHEET.PDF
- Instructional programs for English learners (2002). Instructional Support Services, Language Acquisition Branch, Los Angeles Unified School District.
- Jepsen, C. & De Alth, S. (2005). *English Learners in California Schools*. Public Policy Institute of California. San Francisco, CA.
- LAUSD Local districts. (2007). Los Angeles Unified School District. Retrieved

カリフォルニア州ロサンゼルス統一学区における英語教育の
試みと日本における小学校英語教育への示唆

September 15, 2008, from

[http://notebook.lausd.net/pls/ptl/docs/PAGE/CA_LAUSD/LAUSDNET/ABOUT_US/MAAPS/2008-09%20LOCAL%20DISTRICTS%20ALL%20\(8.5X11\).PDF](http://notebook.lausd.net/pls/ptl/docs/PAGE/CA_LAUSD/LAUSDNET/ABOUT_US/MAAPS/2008-09%20LOCAL%20DISTRICTS%20ALL%20(8.5X11).PDF)

LAUSD English learners improve language proficiency: Improvement Rates Surpass Other School Districts in California. (June 21, 2007) Los Angeles Unified School District. Retrieved September 27, 2008, from,

http://notebook.lausd.net/pls/ptl/docs/PAGE/CA_LAUSD/FLDR_LAUSD_NEWS/FLDR_PRESS_RELEASES/CELDT07.PDF

LAUSD 研修用教材 . *Japanese ESL Institute.* Los Angeles Unified School District Institute Support Services Language Acquisition Branch, Summer, 2004.

McGraw-Hill Press release. (July 25, 2007). LAUSD students outscore peers statewide on English fluency exam: Scores demonstrate continued progress with SRA/McGraw-Hill's Open Court Reading. SRA/McGraw-Hill. Press release on July 25, 2007. Retrieved September 27, 2008 from,

https://www.sraonline.com/download/News/PressRelease/LA_CELDT_Rls.pdf

Payán, R. M. & Nettles, M. T. (2008). *Current State of English-Language Learners in the U.S. K-12 Student Population.* Retrieved September 15, 2008, from,

http://www.ets.org/Media/Conferences_and_Events/pdf/ELLSymposium/ELL_factsheet.pdf

The California Report (2006). *The Language of learning.* Retrieved September 15, 2008 from,

<http://www.californiareport.org/060522-bilingual.jsp#duallanguageimmersion>

Torrance, B. (2006). California's English Learners: Can you say 'held back'? March 21, 2006. *Los Angeles Times.* Retrieved September 15, 2008, from,

<http://articles.latimes.com/2006/mar/21/opinion/oe-torrance21>

- バトラー後藤裕子 (2003) 「多言語社会の言語文化教育：英語を第二言語とする子どもへのアメリカ人教師たちの取り組み」東京：くろしお出版。
- 西村由起子 (1999) 「アメリカにおける『二言語教育』論争 — カリフォルニアの Proposition 227 をめぐって」東洋学園大学紀要、東洋学園大学発行。第 7 号、No. 7.